



病院経営とパリアン

医療法人パリアン理事長
川越 厚

1. 賛育会、賛育会病院とは



パリアンの開設とその後の経営管理にとって、僕が賛育会病院の病院長を経験したことは、大変大きな意味を持っている。

単に組織運営に関することだけではなく、

ホスピスケアの本質に迫る問題に対しても、病院長としての経験は今の僕に大きな示唆を与えてくれた。その意味から、“産科医の経験とホスピスケア”と同様、ホスピス医としての自分のアイデンティティを確認する上で、その時代を振り返ることは特別な意味があると考えている。

病院長として自分は何を考え、何を求め、何をを行ったか。この振り返り作業の内容が、これからの連載文である。

賛育会病院と賛育会

お産で有名なこの病院の名前は、墨田区に住む人だったら誰でも知っているはずである。しかし、賛育会病院の経営母体である賛育会については、知る人が意外と少ないのではないだろうか。まずそのあたりのことを説明したいと思う。

賛育会の創立は1918年(大正7年)。

賛育会は3年後に創立100周年を迎える、老舗の社会福祉法人である。現在は賛育会病院だけではなく、長野市豊野町にある豊野病院や複数の診療所を含む医療施設、東京都町田市にある特別養護老人ホームの清風園など、多数の福祉施設をも



賛育会病院全景(ウィキペディアより)

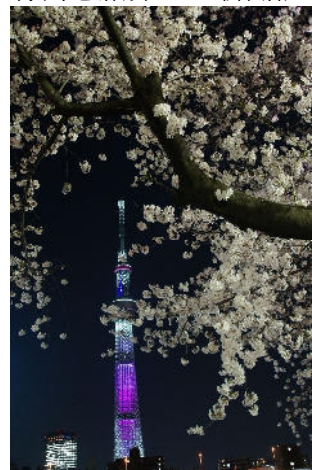
経営している、日本でも5本の指に入る社会福祉法人である。

現在はこのような大きな組織となっているが、その

起源は東京大学学生基督教青年会、通称東大YMCAのOB医師が中心になって立ち上げた、ささやかな無料診療所である。記録によればベッド1台の夜間診療所であったという。まさに徒手空拳のスタートであった。

僕が賛育会病院の病院長に就任したのは、東大医学生の時代に東大YMCAの会員であったことが大きく関係している。

今ではピンと来ないかもしれないが、当時の賛育会を紹介した新聞記事によると、夜間診療所が



開設された地域(これはまさに今の賛育会病院がある地域)は、都内でも特に貧しい人たちが多数住んでいた場所だったようだ。当然その地域の衛生状態、特に母児をめぐる衛生環境は極めて劣悪であり、賛育会の先輩は母性保護、救療のために

立ち上がったのであった。

創立に関わった人たちが、またすごい。

東大産婦人科教授の木下正中。彼は後に賛育会初代理事長に就任した。大正デモクラシーの旗手、吉野作造東大教授。戦後に内閣総理大臣を務めた片山哲。弁護士で衆議院議員の星島二郎など、錚々たる人材であった。

現場で実際の立ち上げを行ったのは、後に賛育会病院の初代院長を務めた、河田茂などの若手医師たちであった。

賛育会病院の基本理念はキリスト教の隣人愛であるが、賛育会の名称は論語の中庸にある『天地ノ化育ヲ賛ク(タスク)』に拠っており、この名称は木下正中が名づけた。

僕が賛育会病院の病院長に就任したのは、1994年で、院長職を辞したのが2000年5月末である。<2ページに続く>



< 1 ページから >

今からかれこれ約 20 年前の話になる。

これまで病院長時代の話を外部的に向かって発したことは全くなかったが、そろそろその時代のことを語ってもよい時期が来たのではないかと考えている。とは言え、私の立場で知っていることを 100% 語るには差しさわりのある内容もあるので、その点はご了承願いたいと思う。

公開定例カンファレンス 3月13日開催

ひとり遺される家族へのケア～認知症の妻が遺された事例～

パリアンでは今、二人暮らしをしていて一人遺された人をどのようにケアしたらいいのだろうかということが課題になっている。「一人遺される家族へのケア～認知症の妻が遺された事例～」をテーマにした公開定例カンファレンスが平成27年3月13日午後6時から、パリアン研修室で行われた。



肝臓がんと診断され、在宅緩和ケアを希望されたAさん（男80代）と認知症症状のあるBさん（女70代）は二人暮らしであった。Aさんは家族、兄弟とのつながりは断絶しており、Bさんは後にキーパーソンとなる弟がいるが、Aさんはその弟から借金をして、その返済が済まないまま自己破産をした。そういう中で、Aさんの病状は悪化し、Bさんの療養先の検討を急いだが、なかなか決まらないうちに、Aさんは亡くなった。Bさんは一人取り遺されたが、弟に金銭的な援助を受け、都内の有料老人ホームへ入所することができた。

Aさんの生前中に、Bさんの行く末を決めてあげられなかったことなど、家族ケアにどこまで関わるべきか課題が残る事例だった。

Aさんの生前中に、Bさんの行く末を決めてあげられなかったことなど、家族ケアにどこまで関わるべきか課題が残る事例だった。

出席者からは、①Aさんの病状悪化に伴い、認知症症状が悪化したときのBさんにはどう対応したか ②家族関係の情報をもっと捉えておく必要があったのではないか ③遺された家族のケアという視点でとらえたことが今まで経験がなく、難しい問題だ ④地域包括ケアセンターに相談してはどうか ⑤老健（介護老人保健施設）を探すことも視野に入れたらどうか、などの質問や意見がでた。

危機的な状況に追い込まれる遺族へのケアをどうするか

パリアン理事長 川越 厚

パリアンの川越厚理事長は、この問題に関して次のように述べている。

『この事例の1か月前に苦い経験をした。高齢の二人暮らしの患者さんがいて、奥さんは認知症ではないが発達障害があって、夫の死の直後に後追い自殺を図った（命に別状なし）事例があり、遺された人へのケアの重要性を再認識した。

ホスピスケアにおける家族ケアとは、患者が亡くなったあとに危機的な状況に追い込まれる遺族への患者が生前中のケアをどうするかということも重要な事であって、患者が亡くなった後にはできないケアである。だから、ケアチームはそういう問題意識をもって、家族ケアを考えていかなければならない。

「一人暮らしは明日の我が身」なので、がんの方だけの問題ではないが、特に時間的な余裕がないがんの方は限られた日数の中で適切なアレンジをしなくてはいけない。我々としては、患者が亡くなった後に遺される方がどのように生活していくのか考えておく必要がある。』

がん患者さんにご家族の体験や悩みを分かち合い、支え合う場

がんサロンSAKURA、3月13日開催

がん患者さんにご家族が体験や悩みを分かち合い、よりよく日々を過ごせるよう支え合う場を提供する、平成26年度墨田区在宅緩和ケア事業「がんサロンSAKURA(さくら)」(主催:墨田区、共催:都立墨東病院・賛育会病院、企画運営:NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこも)が平成27年3月14日午後2時から、すみだ福祉保健センターで12人の患者さんにご家族をお迎えして行われた。

今回は、25年度や11月8、22、29日に3回開催したがんサロンの同窓会のような会で、初めに患者さんの病状や悩みなどの語り合いがあった。女性の患者さんから配偶者のいたわりが足りないとの不満や悩みがあり、男である記者には耳の痛い話題であった。



一人ひとり近況を語る参加者

リラックスタイムでは、折笠満さん、折笠美和子さん夫妻のチェロ・バイオリン二重奏で、愛の挨拶、愛の賛歌など「愛世界一周」と題して8曲が演奏された。最後に「ふるさと」をチェロとバイオリンの伴奏で全員が合唱し、患者さんからは、生演奏を聞き、久しぶりに声を出して歌ったので、心がすっきりしたという喜びの声が聞くことができた。

ティータイムの後、医療者が患者さんの悩みなどの相談を受け、4時30分に閉会となった。



チェロとバイオリン二重奏に聞き入る参加者

パリアンに石川県立看護大学の先生らが来訪

在宅緩和ケア医療・訪問看護やボランティア活動の実態を学習

3月4日(水)午前9時、石川県立看護大学の先生と石川県がん安心サポートハウス つどい場・はなうめの看護師さんとボランティアさん計4名が在宅緩和ケアの実態とそこで活動しているボランティアの活動状況についての情報収集のため、パリアンを来訪した。

朝のカンファレンスに参加した後、石川県がん安心サポートハウスの活動について説明があった。

川越厚医師の「在宅緩和ケア医療について」の話、川越博美看護師の「ボランティアの組織や活動について」の話、その他ボランティアの活動状況や墨田区在宅緩和ケア事業「がんサロンSAKURA」のレクチャーを半日間で受けられ、そのあと、医師や看護師、ボランティアなどと懇談して、金沢への帰途についた。

はなうめの看護師さん「ボランティアの育成に力を入れていきます」



研修を終えて記念写真を撮る

がん安心サポートハウス つどい場・はなうめでは、今後ボランティアの育成に力を入れていく予定であることから、ボランティアになったきっかけや活動の詳しい内容などの質問があり、予定より30分以上も延長して、かなり話が盛り上がった。

また、石川県には聞き書きをされる方が多いと聞いていたので、逆に質問したら、やはり活発な活動をしているようで、今後聞き書きでの交流をしていけたらと思う。



朝のカンファレンスに参加しているお客様

死後の審判であの世に行けるか試されるというエジプト神話

エジプト考古学者吉村作治先生との対談 ジョイNIKKEI 日曜患者学校～川越厚の「がんからの出発」より



ツタンカーメンの黄金のマスク (ウィキペディアより)

エジプト考古学者・早稲田大学名誉教授・東日本国際大学副学長の吉村作治先生を迎えたシリーズの第1・2回の放送分のあらすじ。

吉村先生がエジプト学に興味をもったのは、小学校4年生の時に、図書室で少年少女文学全集という伝記が100冊あって、その100冊目に「ツタンカーメン王のひみつ」という、ツタンカーメンを見つけたイギリスの考古学者、ハワード・カーターという人の伝記があった。それを読んでエジプトに行ってみようと思って、担任の先生に話したのが始まりだそうで、思い始めてから12年で実現し、それから50年経ったとか。未発掘の墓を4つも発見しているのは、吉村先生しかいない。その4つの墓というのは、青いミラーマスクを付けたミイラや親子のミイラ、夫婦のミイラで、それだけで夢をかりたてられるそうだ。

番組では、古代エジプト人が死をどのように考えたかについて、話は進んでいく。死生観という概念はないが、古代エジプト人も、やはり死は恐れており、生きている時に悪いことしなければ生まれ変わるということをして、死ぬ覚悟を作るために“あの世”という考え方を世界で初めて打ち出したのだという。エジプトの神話には、人間がこの世でどういう暮らしをして、あの世にいったらどういう暮らしを望んでいて、あの世に行くためにはどうしたらいいかということが書かれていて、亡くなった後にあの世に行くためのガイドブックみたいなものということができる。

あの世には選ばれた人間だけが行けるといふ。では、どのように選ばれるのだろうか。この世で生きている時に悪いことをしなければあの世に行けるといふ、はっきりとしたコンセプトがあって、その中に最後の審判があり、この世での間違いを裁判で調べ、そこで無罪となった人間だけがあの世にいけるといふのである。今を生きていることはあの世への死の準備と考え、この世は人間が試される場所であって、あの世は人間が喜ばせてもらうところだといふ考えである。死んだ後に裁かれるという思想がエジプト神話にはあり、ともかくこの世の中を悪くしないようにするために、善良な人間はあの世に行けるといふ勧善懲悪的な考えを持ち、法律もモラルもすべて最後の審判で試されるのだといふ。

吉村先生「“死を怖がらない”という頑丈な精神を持つことが大事」

吉村先生の死生観というより人生観としては、先ず第一に“死を怖がらない”ということ考えた。死を怖がらなければあの世もこの世もない。死生観を持たなくても覚悟をもって死を迎えられる人間になりたいといふ。日本人を見ていると、死といふのは怖いし、それを避けて考えないようにしている。しかし、避けないで考えるべきで、そして覚悟をもつことだ。死んであの世に行かなければ、再生しなければいやだと思わないような頑丈な精神を持つように努力すればよいといふ。



三大ピラミッド (ウィキペディアより)

吉村先生がこれからはさろうとしている「第2の太陽の船の発掘復原プロジェクト」は、2隻目を2007年に確認して9年から発掘を始めた。2019年には作り上げて、エジプトの国民に50年間掘削させてもらった感謝の印として差し上げる計画だそうだ。その他、いろいろな王様の墓を見つけたいなど、まだまだ夢はつきないようだ。

住み慣れた家で過ごす重要性について説く 徳之島で、川越夫妻基調講演



奄美新聞(上)、南波日日新聞(下)の2015年3月23日朝刊から

3月21日に鹿児島県徳之島で開催された徳之島地区在宅医療推進フォーラム「できるだけ家で過ごしたい空地域で支えるシマの暮らし」において、パリアンの川越厚医師と川越博美看護師が基調講演を行った。川越医師は、在宅ホスピス緩和ケアで、住み慣れた家で最期まで生きがいを持って安心して暮らすためには、医療者の支援はもちろん、福祉や介護サービスの力を活用することや家族へのケアも重要と説いた。川越看護師は、患者の尊厳を守るために大事なことは、今までの人との関係を絶たないように住み慣れた地域に住み続けることで、医療や福祉の専門職の他、ボランティアも患者を支える重要な役割を持つと強調した。

講演後のシンポジウムでは、大島郡医師会理事や訪問看護師、作業療法士の3人も交え、現場の実情や今後の課題などが討論された。

トピックス

送別会

ケアマネジャーの小磯幸子さん、ホームヘルパーの早川浩美さん、看護師の和田美保さんが3月31日で退職し、送別会が3月25日正午からパリアン研修室で行われた。川越厚理事長から3人に労いの言葉と3人のお別れの挨拶があった。



会食のあと、川越理事長の「花嫁人形」のチェロ演奏や氏田看護師の「レット・イット・ビー」のピアノ演奏があった。最後に全員で「蛍の光」を合唱して3人を送った。

川越厚理事長の挨拶「小磯さんや早川さんには福祉関係の仕事に携わっていただいた。来年度も福祉の充実を目標に掲げているので、お二人の業績を引き継いでいきたい。和田さんは1年という短い期間だったが、多くのことを学んでくれたと思う。3人とも、健康には注意してください。」

小磯さんの話「カンファレンスの時の厚先生の話で、自分の価値観を押し付けない、幕引きをどうするか考える、ということが印象深く残っている。」

早川さんの話「宴会部長として楽しく過ごした。退職するが、同じ墨田区でいろいろなことに関わっていきたいので、よろしくお願ひします。」

和田さんの話「新しいことづくしの1年間だったが、皆さんから教わったことや学んだことを生かして進んでいけたらと思っている。どこかでお会いできることを願っている。」

サロン・ド・パリアンでお茶会



3月13日のサロン・ド・パリアンは、昨年に引き続き芝田葉子さんのお点前で患者さん、ご遺族の方、

医師、看護師、事務スタッフ、ボランティアが出席してお茶会が行われた。野本ちさとさん作の抹茶と桜をイメージした和菓子をいただきながら風流な一時を楽しんだ。昨年のお茶会に患者さんと二人で参加されたご遺族の方は、当時を思い出しながらお茶を味わっていた様子だった。

抹茶は心を落ち着かせるテアニンを多く含み、また茶葉を粉末にしてあるので、ビタミンA・Dを摂りやすく、健康で長生きするためには恰好の飲み物。愛飲してはいかがですか。

ボランティア・スタッフ懇親会&新スタッフ歓迎会 4月17日に上野で

日頃ゆっくり話す機会がないボランティアとスタッフが交流を深めるため、「ボランティア・スタッフ懇親会&新スタッフ歓迎会」が4月17日(金)に開催される。

この会合は、「平成27年度第1回ボランティアの集い」も兼ねており、メンバーの自己紹介と各ボランティアリーダーから26年度活動報告と27年度活動計画の発表を行う。

4月のボランティア活動予定

- ・訪問ボランティア：4月10日(金)午後1時45分～
- ・サロン・ド・パリアン：4月3日、10日、17日、24日
- ・命日カードボランティア：4月16日(木)午前10時～
- ・手作りボランティア：4月16日(木)午後1時～
- ・事務&聞き書きボランティア：4月18日(土)午後1時～



4月の花(芝田さん提供)

編集後記

パリアン通信は本号で50号となる。第1号は2010年7月1日に「ボランティアグループパリアン会報」として発行された。その後、15号(12年4月発行)から「パリアン通信」と名称を変更し、名実ともにパリアンの機関紙になった◆いまやパリアン通信は、スタッフやボランティアだけの機関紙ではなくなった。200を超える医療機関や事業所などへのメールや郵送の配信だけでなく、フェイスブックにも掲載して、全国の皆さんが読むことができる機関紙になった◆それだけに、カンファレンスや講演会の模様などスタッフの活動を少しでも多く伝えたいと思っているが、医師や看護師の医療スタッフの活動内容は、患者さんやご家族の個人情報に触れるので、おのずと記事の内容には限界があり、毎号の内容が限定的にならざるを得ない◆その中で、連載している川越理事長のコラムは、部外の読者からも称賛の声が届くなど好評で、現在までパリアン通信の1面の定位置となっている◆なかなか解決策は見当たらないけれども、ともあれ、パリアン通信の内容を充実させていくための努力と、パリアン通信を発行し続けることは念頭に置いて頑張るつもりである。読者の皆様のさらなるご協力とご鞭撻をお願いする(編集部)